(三) 白銀を授かる

それから数年――。つるの生きもによつて病から回復した母は風邪一つひくこともなく大変丈夫であつた。ある日、近年稀れな程の大暴風雨がやつて来た。善知は、作物をとりいれたり、薪を入れたり大騒ぎをして、ホットしていると、突然「たすけてくれーつ」という声が聞える。これを聞いた善知は、はだしのままとび出し、声をたよりに滑る山道を走つた。また「たすけてくれーつ」という声、そくるのだつた。善知が川岸にたつてのぞいてみると、川岸の木の根にすがりつき、半身を濁流にまきこまれてうごめている人影が見えた。

善知は身の危険も忘れ、とつさに帯をとくと、一端を木の幹に結び、一端で自分の体を結び、そろそろと崖をおり老人を救いあげ、家につれ帰り介抱した。やがて意識を戻した老人は、救つてくれたことを喜び、親子に何回もお礼をいうのであつた。老人はこの地をいかがいうかと尋ねた。善知は別に名はないから里人達は畑と呼ぶようになつたというと私どもが畑を作つて安心したのかまた深い眠りに落ちていつた。

朝がくると、昨日の大暴風雨などはうそでの晴天であつた。老人は深く眠つて疲れがとれて案外元気であつた。そして老人はこの日からでしまつた。

ある日、老母が泉から水をくんでくるのを見ていた老人は、何を思つたか善知をよんで「そなたの母は何才になるが、見らるる通り大変丈夫で、今も泉より水をくみ、野山の菜をつみ、あるいは薪なども集めて我を助けてくれます」と答えると、老人は眼をむき声をあらげて「汝は人としての孝道を知らず、老たる母に菜をつませ、水を求めさせ、この深山に母を苦しめ打ちはたさんとするは、なんたる不孝者よ」と叫び叱る。善知は恐る恐る小声にて、「母は今も私を小児の如く扱い、暑い日は笠を用いざるとて叱り、寒き時は火によらざると叱り、髪をくしけずる時は頭が動くとて叱り、それをもつて楽しみとし、またこの庵の近傍に父の亡骸を埋め、そのわきに我とともに住むことを願つているため、私は母の意に従つているのである」と、それを聞いた老人は、いくらか語をやわらげて「善知そちは富貴をのぞまぬか」と重ねて尋ねる。善知は「富貴という言葉を我はわきまえず、我はただ母が何才までも、生き長らえたまわんことのみを望む」といえば、老人ははたとひざをたたいて立ちあがり「我と来れ」と家をでた。

善知はいぶかしく思つたが、老人のあとについて行くと、老人は山を越え谷をわたり深い谷間に入つて行く。その足の早いこと、善知の如く山に育つた者でも、かけるがごとくに追わなければ、ついて行くことができぬ程であつた。やがて老人はとある岩頭に立つてかたわらに生えていた名も知らぬ草をひきぬき、根についた土ごと持ち帰り、鍋に入れて半日がかりで煮つめさせた。始め土色の汁がぶつぶつとあわをふいて煮えたつていたが、紫色となりそれから灰色にかわつた。老人はすぐ火をとめ鍋をおろして、灰色の皮をはぎとると、日もくらむばかりの白銀ができていた。老人は手を打つて喜び「汝、これをもつて国府に訴えよ」といつたかと思うと、老人の姿は稲妻のように輝き消え去つた。母も善知も余りの不思議さに吊然としていたが、善知は老人にいわれた通り旅仕度をして、白銀を背に家をでて国の守護に申しでた。守護は珍しい金属に驚き早速ときの天皇（堀川天皇という）におとどけし、善知はたくさんの賞をいただいて帰つたという。これが現在の畑鉱山の発見であるという。